

松下電器 の挑戦



SDメモリカードで挑むバリューチェーン 普及に弾みをつけるD-snap audio

3月17日、東京・有明のパナソニックセンター。この日、報道関係者を対象にSDメモリカードを搭載した携帯オーディオプレーヤー「D-snap audio」の製品発表会が開かれていた。

冒頭、挨拶に立った松下電器パナソニックマーケティング本部の牛丸俊三本部長は、「今後、SDカードスロットがないデジタルAV機器は皆無になる」と宣言して見せた。

2004年度は、全世界で8000万枚以上を出荷、市場シェアでは6割を超える圧倒的な強さを見せるSDメモリカード。デジタルカメラの標準的メディアと位置づけられていることから、その普及ぶりはわかる。

牛丸本部長の宣言は、このSDメモリカード事業をさらに加速することを示すものとなった。

松下が取り組む3Dバリューチェーン

松下電器は、主力となるAVC事業において、「3Dバリューチェーン」という構想を掲げる。

3Dバリューチェーンとは、デジタルTV（薄型TV）、DVD、そしてSDの3つの「D」を指し、それをAVC事業の中核と捉え、それぞれの融合や相互接続することで、AV機器の新たな利用提案、利用価値を生み出すのが狙いだ。

「2002年下期にこの構想を掲げて以降、まずは、個別の製品そのものがそれぞれに存在感を持つことに力を注

いだ。そのベース作りという点では、ほぼ思い通りの成果があがっている」と語るのは大坪文雄代表取締役専務だ。

プラズマTVやDVDレコーダの世帯普及率が高まる中、松下電器はこれらの分野で高いシェアを維持。SDメモリカードも、標準的なメディアとしてすでに全世界規模で認知されている。こうした3Dバリューチェーンとしての第一フェーズの成功を受けて、「今後は、それぞれの機器をつなぐバリューチェーンを積極的に推進していくことになる」と話す。

その中でSDメモリカードが、極めて重要な役割を果たすのは明らかだ。

松下電器では、3Dバリューチェーン実現のひとつの手法として、SDメモリカードによるブリッジメディアとしての活用を掲げている。競合他社が、有線や無線LANによる機器間のネットワーク接続を前面に打ち出しているのとは異なるといえる。

その点を大坪専務は次のように話す。「バリューチェーンをもっともわかりやすく提案できるのがSDメモリカードによる機器間ブリッジ。ここから提案を始めていくことが普及には近道と判断した」

「わかりやすい提案がデジタル家電には必要」とする松下電器の基本的な考え方は、SDメモリカードによるバリューチェーンをベースとして、将来的には、ネットワークを介したバリューチェーンへとつながっていくことになる。

オフラインネットワークを実現

SDメモリカード事業を担当するパナソニックAVCネットワークス社SDソリューショングループ・本間哲朗グループマネージャーは「機器間のオフラインネットワークを実現するためのメディア」とSDメモリカードを位置づける。

「従来のメディアは、録音用ならば録音用、録画用ならば録画用、カメラにはカメラ用というように、用途や機器ごとに一對一ともいえる状況だった。だが、SDメモリカードは動画や静止画、音楽、アプリケーションソフトも1枚のメディアに入れることができる。機器間のブリッジには、最適のメディアだ」と語る。

SDメモリカードには、四つの特徴

がある。ひとつは、コンパクトで、スリムなパッケージとしている点だ。「これ以上小さい、あるいはこれ以上薄いと使っていて不安になるという手前ギリギリのサイズを採用している。機器間をブリッジするのに安心して使える最小のサイズをSDで実現した」（本間グループマネージャー）という。

二つめは、最大8枚までフラッシュメモリを搭載できる設計だ。これにより、2000年に最大64MBで投入したSDメモリカードは、今年前半に投入が予定されている2GBまで、同一の設計でシームレスに拡張することができる。また、この設計をベースにした、今後の拡張も進められることになる。

三つめの特徴は、データ転送レート

が高い点。4ビットのパラレル転送に よって、1GB版では20MB/secの速度を実現。これはHDDよりも速い。大容量のデータの取り扱い時ほど、高速転送は効果を発揮することになる。

そして、最後の特徴が著作権保護機能の搭載だ。SDメモリカードでは、CPRMと呼ばれる著作権保護技術を採用しており、機器間の相互認証でのアクセスや、認証情報の乱数化によるセキュアな情報転送などを実現している。「これまでは、単なるメモリカードとしての利用にしか使われていなかったが、今後は、音楽著作権保護、映像著作権保護などの観点からも、効果を発揮できるとなる」と期待を寄せる。

一方、SDメモリカードには三つの「ライト（RIGHT）」という言葉が

ある。ひとつは「ライトプロダクトコンセプト」。先にあげた四つの特徴が、ほかの規格との差異化につながっているのは明らか。その基本的な考え方が業界に認知され、それがデジタルカメラでの標準メディアとなるなどの成果につながっている。二つめが、ライトスタンダライゼーション。SDメモリカードの物理規格は松下電器、東芝、サンディスクの3社で決定したが、応用規格に関しては、SDアソシエーションに参加する企業が、11に分割されるワーキンググループで議論を行ない、フェアな議論の上で決定する。この仕組みが重要なポイントだという。そして、三つめがライトアライアンスだ。AV、家電、IT、通信などあらゆる領域のメーカーが参加することでSDメモリカードが利用される範囲は急速に広がっている。

この三つのライトがSDメモリカードの成功を支えるキーワードというわけだ。また、大容量化と低価格化が急速な勢いで進展している点も普及要素として見逃せない。

2001年に、256MB版が登場した際には2万5000円前後で販売されていたものが、現在では5000円台で販売されている状況。今後も価格引き下げが可能と見られており、さらにユーザーが購入しやすい環境が整うことになる。かつてはもっとも高価なメモリカードと言われていたSDメモリカードが、その普及とともに、いまやもっとも安価なメモリカードとなっている



松下電器産業株式会社
代表取締役専務
パナソニックAVCネットワークス社 社長

大坪 文雄

松下電器のAV事業のキーワードは
3Dバリューチェーン。
SDはそれを支えるブリッジメディアだ



D-snap audioとSDメモリーカードを持つ浜崎あゆみ。「音飛ばさないのでジムでも使える」と話す

のだから驚きた。

「これまではデジタルカメラの普及によって、SDメモリーカード事業をドライブしてきた。今後は、携帯電話やテレビ、さまざまなAV機器、白物家電などを含めたメディアネットワークを実現したい」と本間グループマネージャーは語る。

とくに「オーディオ機器は、著作権保護の機能を生かせる最大の分野。なんとしてでも、ここで成功させたい」と、

SDが持つ4つの強みが 発揮されるのは これからだ



松下電器産業株式会社
パナソニックAVCネットワークス社
SDソリューショングループ
グループマネージャー

本間 哲朗

「オーディオプレイヤーが置かれた環境が大きく変化し、新たな段階へと突入したと判断。今年が『携帯オーディオ事業再興の年』だと捉えた」と、パナソニックAVCネットワークス社パーソナルAVビジネスユニットリーダー

本間グループマネージャーは次なるステップへの挑戦に意気込みを見せる。

オーディオ分野に本格展開

SDメモリーカードの普及戦略の上で、松下電器がいよいよ本格的に乗り出してきたのが、携帯オーディオプレイヤー市場だ。

同社は、4月8日から「Dsnap audio」の名称で、上位機にSDメモリーカードを採用したモデルを用意。この分野に本格的に打って出た。

実は、同社では、SDメモリーカードを搭載した携帯オーディオプレイヤーを2000年から発売しており、今回の製品で第5世代目となる。

「かつての製品は、SDを搭載した単品としての提案に過ぎなかった。しかし、携帯オーディオプレイヤーが注目を集めるなかで、SDならではの音質の良さを訴えることができるようになる」とともに、技術の進化によって、SDの大容量化と価格低下の推進や、さまざまな機器との連携が図れる環境になってきた。SDと携帯オーディオプレイヤーが置かれた環境が大きく変化し、新たな段階へと突入したと判断。今年が『携帯オーディオ事業再興の年』だと捉えた」と、パナソニックAVCネットワークス社パーソナルAVビジネスユニットリーダー

今後のオーディオ事業は SDを基軸に 展開することになる



松下電器産業株式会社
パナソニックAVCネットワークス社
パーソナルAVビジネスユニットポータブル
オーディオカテゴリー カテゴリーオーナー

松田 雅信

「オーディオのリマスター技術を応用し、デジタル音声データをCDに迫るクオリティで再現することに成功した。一方で、ハイフミラーから浮き上がる有機ELも長時間使用に耐えられるものを厳選し、スタイリッシュさを演出した」と自信を見せる。

「オーディオカテゴリー・松田雅信カテゴリーオーナーは語る。Dsnap audioの開発は、2004年春から開始された。『こだわったのは、SDメモリーカードのサイズを活かした筐体の大きさとする』こと、そして、それを多くの人に身につけてもらえるデザインを採用した」と松田カテゴリーオーナーは語る。

手のひらに収まるサイズに、メモリーカードスロット、電源、FMチューナー機能などを収納。それとともに、ハイフミラーから浮き上がる有機ELディスプレイの表示板を採用した。それでいて、1チップに収められたデジタルアンプにより実現する「Dサウンドエンジン」の採用など、音質にも徹底的にこだわった。

「従来から手がけているホームオー

また、Dsnap audioと連動させることを目的に、SDカードスロットを内蔵したコンポを新たに投入。CDリッピングなどを行ないやすい環境を整えた。これによって、パソコンの操作が苦手な利用者に対しても、携帯オーディオプレイヤーが使いやすい環境を整えたのである。

Dsnap audioは、浜崎あゆみを起用した広告効果もあって、発売以来、好調な出足を見せている。同社では、iPodが先行している携帯オーディオプレイヤー市場で、まずは2割のシェアを取ることを目標に掲げる。

「MDプレイヤー、CDプレイヤーにも引き続き力を注ぐが、今後の携帯オーディオ事業の基軸はSDプレイヤーに置くことになる」と、松田カテゴリーオーナーは語る。

第1号製品の投入に続き、今後も引き続きラインナップを強化し、シリーズ展開が図られるのは明らかだ。そして、その製品企画がすでに始まっているのはいうまでもない。



Tナビを通じて提供されている昭文社のマップルネットの画面。リモコンを使用して、簡単な操作でデータをダウンロードできるのが特徴だ



SDメモリーカードの大容量化はこれからも続く。今年前半には、いよいよ2GB版が登場することになる



5月1日から出荷される新VIERAの会見には、イメージキャラクターの小雪が登場。新VIERAにもSDカードスロットは標準搭載されている

サービスにも広がりを見せる

SDメモリーカードは、さまざまな機器への展開は当然だが、その一方で、サービス、ソリューションの観点からの取り組みにも余念がない。

eネット事業本部ネットワークサービス事業推進室Tナビサービスグループ・大野誠一グループマネージャーは、「Tナビとの連動によって、SDの世界はますます広がりを見せることになる」と断言する。

Tナビとは、TVを利用したインターネットサービス。2003年5月のサービス開始にあわせて、ブラウン管TVの「デジタルタワー」でTナビ対応第1号機を投入。同年9月には薄型TV「VIERA」の発売とともにTナビを標準対応したのに続き、10月には他メーカーからもTナビ対応TVが登場。これまでに10社から約50種類、累計180万台のTナビ対応TV、チューナーが出ている。

現在、Tナビでは、約140のサイトからさまざまな情報を提供しているが、この中には、提供される情報をSDメモリーカードにダウンロードして、テレビ以外の機器で利用することを前提としたサービスもある。

例えば、TVと接続してカラオケを楽しむことができる「ゆめカラ」では、SDメモリーカードに収録して市販されているカラオケデータのほか、Tナビを通じて1曲ごとにカラオケの楽曲をダ

Tナビは、SDの普及でさらに広がりを見せる

ダウンロードすることができる。

また、昭文社が提供しているマップルネットでは、最新の情報をSDメモリーカードにダウンロード、カーナビにデータを落とすことで、カーナビには標準搭載されていない細かなランドマーク情報を活用できるようになる。

すでに、SDカードスロットを標準搭載した薄型TVは、松下電器以外から発売されているものを含めて累計約100万台の出荷実績があり、TナビとSDメモリーカードの連携が促進されやすい環境が整いつつある。

「今後は、D・snap audioで利用するために、Tナビを通じて、音楽データをダウンロードできるといったサービスも検討している。用途はますます広がることになる」と大野グループマネージャーは語る。



松下電器産業株式会社
eネット事業本部ネットワークサービス
事業推進室Tナビサービスグループ
グループマネージャー

大野 誠一

可能性を示す。

大坪専務は、「SDカードが持つ四つの特性を捉えれば応用範囲は広い。とくに、著作権保護機能は、データ配信の面で大きな威力を発揮することができる。ますますワイドスコープで展開できる」と、SDメモリーカードの



【取材・執筆略歴】大河原克行(おおかわら かつゆき)1965年、東京都出身。IT業界専門紙『BCN』で編集長を務めるなど、IT産業を中心に幅広く取材、執筆活動続ける。著書に「松下電器変革への挑戦」(宝島社刊)など。

【撮影】井手口恵子(いでぐち けいこ)

「3Dパリビューチェーンのなかでは、今後、HD(ハイディフィニション)映像への展開、ユニバーサルデザインの採用、そしてコンテンツディストリビューションが鍵になる。SDメモリーカードがブリッジメディアとして果たす役割は重要になる」(大坪社長)のは明らかだ。

現在は標準搭載されていないカーナビへの展開や、SDメモリーカードのさらなる大容量化に伴って、ビデオカメラに搭載するといったことも可能になりそうだ。

標準メモリーカードとしての地位を獲得したともいえるSDメモリーカードだが、実は、普及戦略は、これからが本番だといえる。